日本青年団新聞

Youth Post

2023 vol. 2

108巻第2号　発行2023年5月1日

編集・発行　日本青年団協議会

〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4-1日本青年館5階
TEL 03-6452-9025　FAX 03-6452-9026
MAIL dan_news@dan.or.jp
Web　https://www.dan.or.jp

Back to the Basics　～原点回帰～

Action

２ｐ　３年ぶりとなる神祭の開催（三重県・答志青年団）

３ｐ　２人から始まる青年団
（鳥取県・境港新青年団発足プロジェクト Wakey!）

３ｐ　異次元の出会いがここに
（高知県・高知中央地区青年団協議会）

Focus

４－５ｐ　青年団とＳＤＧｓ
明治神宮の造営と日本青年館の竣工
働くだけではなく、地域で生きるための学びを
１５０年先を見据えた神宮の杜建設
杜をつなぐ目と芽を育む
（特定非営利活動法人響 / 理事長　佐藤　峻　氏）

４ｐ　建物の記憶　失われても　私たちが記憶をつなぐ
（令和５年北方領土返還要求全国大会）

リーダーと語る

６ｐ　若者パワーでまちを盛り上げる
（東京都・はちおうじ若者会議 / 楢島杏奈氏）

青年団ってどんなところ？～おらほのまちの青年団～

７ｐ　楽しさの波紋拡がる（山形県・南陽市観光協会）

Opinion

８ｐ　私たち青年団の役割を改めて問う

イケ団

８ｐ　地域とともに伝統をつなげていく
（福島県・明和青年団 / 児島達志氏）

はらぺこ青年団

８ｐ「熊ホル」
（松田恵美子支局員・岩手県青年団体協議会）

「Youth Post・ユースポスト」とは、青年の活動や想いが全国に届くことを願って、Youth・ユース（青年）と Post・ポスト（郵便物）を組み合わせたものです。
本紙は、青年や青年団が全国でいきいきと活躍する姿を伝える日本青年団協議会の機関紙・広報紙です。

3年ぶりとなる神祭の開催

～「マルハチ」で1年の大漁を願う～（三重県鳥羽市答志町）

◆島に伝わる例大祭

鳥羽港から北東約2．5㎞の沖合に浮かぶ伊勢湾最大の離島、答志島。2月18日～19日にかけて、コロナ禍で中止していた八幡祭りが3年ぶりに行われた。地元では神祭と呼ばれる一大行事で、なかでも勇壮な弓引神事はまつりの中で最も盛り上がる。お的衆と呼ばれる若者が、「お的」※を担いで坂を駆け上がると、町民が次々とお的に飛び込み墨を奪い合う。人々は奪った墨を持ち帰り、護符に代わるこの墨で家の戸口や船にマルハチ（丸に八の字）を書いて、大漁と海上安全を祈願する。江戸時代より伝わる歴史あるまつりだ。

弓矢行事を一目見ようと町民で溢れかえる

※お的……木組みに紙を貼って墨を塗ったもの。

◆答志青年団の活躍

このまつりの運営を行うのは**答志青年団**。団員は約10名と少ないながらも伝統行事の継承を担っている。団の規定でこれまで26歳までだった年齢制限を、町の高齢化とともに29歳に引き上げた。八幡祭りもかつては青年団だけで運営が行われていたが、今では町の組合らが手伝う。それでも青年団員が担う役目は大きい。まつりには海の神様、八幡神に豊漁を願う習わしがあるため、団員はまつりの2日前からお宿に入り、様々な儀礼をこなす。当日の朝には早朝5時に起きて、一糸纏わぬ姿で4回ほど海に入り身を清めるのだ。いよいよクライマックスである弓引きの時刻が近づいてくると、青年団からなる七人使い7名が神事の舞台に入り、準備を行う。弓引きが終わりホッと胸を撫で下ろしたのも束の間、踊りや劇などの演芸が2日間にわたり行われ、まつりに華を添える。

◆伝統を守るために

演芸のプログラム作成等の打合せも、青年団の重要な役目だ。また、青年団自身も芸能のひとつである三番叟を演じる。団員数の減少に伴い、演芸の期間は減らしたが、縮小させたことで「スケジュールも組みやすくなり、今まで以上に力を入れられるようになった」と語るのは団長の山下秀斗さん（29）。古き良きではなく、今の時代にあわせたやり方を大切にしながらまつりをつないでいる、と語る。まつりが終わると、いつも通りの日常に戻るが、町中にはマルハチと書かれた墨字が至る所に。こうして答志の海と伝統が守られていく。

お問合せ：日本青年団協議会まで　TEL：03-6452-9025

三番叟で演芸の幕が上がる

神事の舞台を整えるのは、青年団からなる七人使い

2人から始まる青年団

～役所も施設も高校生も巻き込んで～

（鳥取県境港（さかいみなと）市）

2022年4月、境港市に新たな青年団が発足した。その名は、**境港新青年団発足プロジェクトWakey!（ウェイキー）**。立ち上げた井田敦大（あつひろ）さん（21）は境港市で育ち、隣の島根県松江市にある島根大学4年生。井田さんは、松江には若者が集う団体があるものの、境港にはそうした場がないと感じていた。そこで同級生の吉岡彩那さん（21）と共にWakey!を発足させた。団体名は、上の世代からも応援してもらえるよう境港に今は無い「青年団」という名前をつけ、愛称として「若ぇ」の語感と「目覚め」の意味を込めたWakey!とした。現在、社会人を含む団員5名で活動している。

全員で卓を囲み、施設の利用ルールづくり

吉岡さんは、社会教育士の資格取得に向けても取り組んでいた。そこで、境港市の生涯学習課に相談したところ大変前向きで、現在まで他団体の紹介など協力いただいている。3月27日には、2022年7月に開設され事業拠点としている境港市民交流センター利用ルールのアイデアを、高校生と共に出し合うワークショップを設けた。高校生からは「みんなで話し合うことでゴールにたどり着けた」など前向きな声が聞かれた。団員からは、まちの夏祭りに模擬店を出したいと声が上がり、今後に向けた視野をますます広げている。

お問合せ：Instagramで「境港新青年団発足プロジェクトWakey!」と検索

異次元の出逢いがここに

～令和の若者世代の先頭車両『青年団』～

（高知県高知市）

高知中央地区青年団協議会（中青協）は、アフターコロナの先駆けに異業種交流をテーマにスポーツイベントを企画し運営の中核を担った。地域や団体、職業などの垣根を超えて県内の若者に声をかけ、約50名が集い、運動会競技3本勝負（借り人競争、綱引き、二人三脚リレー）などを行った。各チームリーダーと確認し、それぞれの得意分野をいかしながら場をつくり上げることは、一筋縄ではいかなかった。それでも、参加者からは「こんなに楽しいつながりの場があるんだ！また呼んでほしい！」と嬉しい感想を多く聞くことができた。他のイベントにはない温かさやおせっかいさに触れ、青年団に興味を持ってくれる方もいた。

汗を流して心を引き寄せあう参加者たち

中青協は「まずは全力で楽しむ・飛び込む・人をつなぐ」ことを大事にしている。今回のイベントで確実に若者は地域にいるが、きっかけがないだけだと一同は確かな手ごたえを実感し、この空間を大切にしていきたいと感じた。「これからは青年団が若者世代をグングン引っ張っていく先頭車両になりたい。週末はぜひ、リアル地域活動&青年団に来て楽しさを実感してほしい。笑顔らんまんな高知家を目指して、やるぜよ♪」、と中青協の全員が気込んでいる。

●林田翔平支局員（高知県青年団協議会）より投稿

お問合せ：高知県青年団協議会　kochikennseikyou@yahoo.co.jp

16 平和と公正をすべての人に

青年団とSDGs

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

初詣の参拝者数日本一を誇る明治神宮。その豊かな杜(もり)※1に一歩立ち入れば、ここが東京の中心地にあるということを思わず忘れてしまうような、神秘的で荘厳なオーラに包まれている。およそ１００年前に荒れた原野を現在も残る杜に変えたのは、当時明治神宮の造営奉仕に携わった延べ 11 万人の青年団員の功績が大きい。

本号では、青年団による明治神宮の造営奉仕をＳＤＧｓの「目標４：質の高い教育」、「目標 11：住み続けられるまちづくりを」の視点から考察し、明治神宮造営の中に息づく先人たちの軌跡をたどっていきたい。

明治神宮の造営と日本青年館の竣工

１９１２年に明治天皇が崩御されたことを受け、２０２４年から新一万円札に描かれる実業家の渋沢栄一らが、明治神宮の創設を提唱した。１９１５年に明治神宮の造営が始まるものの、第一次世界大戦による物価の高騰、労働力不足に直面する。そこで、内務省で明治神宮の造営を担当した田澤義鋪(よしはる)は、以前に赴任先の静岡県で出会った青年団のことを思い出し、青年団の労力奉仕（現在で言うボランティア）で明治神宮を造営することを提案した。

田澤の呼びかけに応え、全国の２０９の青年団が１～２週間程度の期間の入れ替わりで、共同生活をおくりながら丘を切り崩しなだらかな地形をつくったり、木を植え参道をつくったりした。延べ11万人が力を結集した結果、１９２０年に明治神宮が創設された。その功績が認められ、青年団員らは皇太子殿下（後の昭和天皇）から令旨(りょうじ)を賜った。この栄光と感動を記念して日本青年館の建設が打ち出され、全国の青年団員による募金運動を行い、１９２５年に初代日本青年館が竣工した。

4 質の高い教育をみんなに

教育は私たちに、健康で持続可能な生活を送る知恵をもたらします。そして集団生活は社会の中で他者と共存し合うことや、相手を思いやる心を育みます。持続可能な社会をつくるには、生活の営みの中から生まれる規律や知恵を学ぶことが欠かせません。

働くだけではなく、地域で生きるための学びを

明治神宮が造営された大正時代、義務教育とされた尋常(じんじょう)小学校入学者のうち、５～６割が卒業と同時に働きはじめ、高等小学校に進学する者は４割しかいないという状況（水谷※2，２００８）だった。現代から見れば、大衆が教育を受ける機会は決して十分ではなかった時代だったと言える。田澤は赴任先での青年団との出会いから、地域には青年リーダーが必要であり、その育成には宿泊を伴った教育・研修が重要と考えた。そこで明治神宮の造営奉仕をリーダー研修期間にすることにした。例えば静岡県志太郡青年団（現・藤枝市、焼津市、島田市等）に対しては、土木作業の後に田澤が自ら「日本青年団の特點（特徴）」と題して講演した。また、時事新報社（毎日新聞社の前身の一つ）が青年団一行の社内見学を企画するなど、教育プログラムを組んだ。他にも、宮城県柴田郡青年団はイギリス皇太子来日に合わせて奉迎を行うなど、とても地元ではできない貴重な経験をした。「十日間の自治的生活を今後の規範として天晴

宿舎で食事をする秋田県由利郡青年団
（帝国軍人教育会編集・発行
「明治神宮御写真帖　附御造営記録」大正９年）

建物の記憶　失われても　私たちが記憶をつなぐ

ロシアによるウクライナ侵略が始まって間もなく一年となる、２月７日「北方領土の日」。間もなく建て替えが始まる東京の国立劇場で、令和５年北方領土返還要求全国大会が、岸田文雄内閣総理大臣ら政府要人も臨席のもと、対面では３年ぶりとなるオンラインとのハイブリッドにより開催された。大会実行委員長を務めた日青協の中園謙二会長は、今年１月に択捉島に残っていた紗那(しゃな)国民学校が全焼し、また一つ北方領土に残る日本の歴史が失われたことを引き合いに、「語り継ぐことが北方領土問題を風化させないこと」だと力強く述べた。

官民が一体となって返還を求めていく

※１　「杜」の字は明治神宮を含む際に用いる
※２　水谷智彦「大正期小学校の評価に影響を与えた社会的要因の研究」，立教大学教育学科研究年報 (60), P. 147-170, 2017

恥ずかしからぬ青年男子たらむことを期せむかな（自分たちの手でつくってきた10日間の生活を今後の手本にして、見事で恥ずかしくない青年男子でありたいものである）」との参加団員の感想の記録が残っている。このように、造営奉仕は現在で言うところのＳＤＧｓの発想に立った、青年たちにとっての学びの機会だった。

11 住み続けられるまちづくりを

ターゲット11では都市における文化遺産や自然遺産を守っていくように保つことが具体的な目標として定められています。近年では都市における森林や樹木がヒートアイランド現象など様々な都市問題を解決するとして、その価値が高まっています。

150年先を見据えた神宮の杜建設

造営から１００年たった今でも、森は人や動物たちの憩いの場になっている。当初、明治神宮の内苑（ないえん）（↔外苑（がいえん））……日本青年館の周辺含む）の予定地だった代々木の地は、何も無い荒れ地であり、どのように自然林に近い森をつくるかが課題だった。当時の林学者らは、１００～１５０年をかけて、人が手を加えることなく森自身がその形を変えながらも進化していく、新たな森づくりを提唱した。はじめはアカマツやクロマツの間に、ヒノキやスギなどを植え、その下に将来のメインとなるカシやシイ、クスノキなどの常緑広葉樹を植えた針葉樹主体の森。時代が経つにつれ、東京の気候に適した常緑広葉樹が大きくなり、淘汰（とうた）を繰り返しながら、天然の森へと近づいていくものである。これらの木々は、全国からの約10万本の献木（寄付）で集められた。地域の銘木と言われる木を寄せた地域も多かったと言われる。この杜は今でも青々として、都内随一のパワースポットとしても知られる。

植樹のため木を運ぶ青年団員（明治神宮提供）

ここまで見てきたように、造営当時から現在まで、明治神宮にはＳＤＧｓの発想が存分にいかされ続けている。先人たちからの贈り物に、今を生きる私たちの想いをのせて、次の１００年につないでいこう。

杜をつなぐ目と芽を育む

特定非営利活動法人響（ひびき）　理事長・佐藤　峻　氏

響は2001年に大学生らが創立した団体です。百年前の明治神宮の御造営に汗を流した青年達の物語に感化され「今を生きる私たちには何ができるか」という想いから活動が始まりました。軸にあるのは「どんぐりの活動」と「たんぼの活動」です。

「どんぐりの活動」では、一木一草持ち出し禁止の明治神宮境内で、特別許可を得て７種のどんぐりを拾い、国土緑化推進のために実生苗木（みしょうなえぎ）を育てています。この苗木は、たとえば滋賀県や宮城県において青年団／青年館の皆様との連携で植樹につながり、百年越しの“里帰り”そして“恩返し”となりました。

「たんぼの活動」では、一般立入禁止の森の一角にたんぼをつくり、伝統的な稲作に挑戦しています。田植えや稲刈りに合わせ、神職の御協力のもと御田植祭や抜穂祭という伝統祭事を行い、地元の千駄谷小学校の児童が生きた土に触れて自然や文化を体験する機会にもなっています。

これら活動の背景には、自然と生活が調和してきた日本文化の根っこにある「こころ」の継承こそが、森と社会の永続に重要だという信念があります。その伝統的かつ現代的なひとつの形が東京に実存しているのです。青年団の先輩が遺してくれた、１００年を超えて今でも私たちの学びの場となっている明治神宮代々木の杜に、ぜひ訪れてみませんか。

プロフィール

さとう・しゅん。34歳。茨城県水戸市出身。京都大学総合人間学部卒、同大学院地球環境学舎修了。平成26年アースデイいのちの森「早朝の明治神宮境内を歩く」でNPO法人響を知り入会、平成28年より理事長。『明治神宮100年の森で未来を語る』鹿島出版会（令和５年）には、鎮座百年記念「Mの森連続フォーラム」における響の担当回「いのちの森で目と芽を育む」が収録されている。

第71回全国青年大会開催!!

2023年11月10日（金）から14日（月）まで開催されるアマチュアスポーツ・芸能文化の祭典です。

昨年度大会バナー　↑

申込締切：10月2日（月）17時必着

NISSEIKYO ～創る・結ぶ・学ぶ～

日青協SNSのチェックやいいねをお願いします！

website　facebook　Twitter　Instagram

▼楢島　杏奈　氏（写真左）

ならしま　きょうな。1996年生まれ。東京都昭島市出身。両親の影響で公務員をめざし、八王子市へ入庁。個人活動でも様々なことに挑戦しており、そのひとつに2022年7月に「はちおうじ若者会議」を結成。市職員としても個人としても地域のため人のために役に立つ人になれるよう活動中。趣味はトレイルランニングやスキー。

▼日本青年団協議会会長　中園　謙二（写真右）

1980年生まれ。岡山県倉敷市在住。2008年に岡山県青年団協議会に入会する。日本青年団協議会役員を経て2020年より会長を務めている。

リーダーと語る

若者パワーでまちを盛り上げる

社会の最前線で活躍する方と語り、あらゆる角度から見つめ直す本企画。今号では、若者ならではの視点を地域にいかすとともに、若者と地域のつながりを構築する若者会議に焦点をあてていく。今回は、2022年7月に「はちおうじ若者会議」を立ち上げた楢島杏奈氏をお迎えした。

◆地域に飛び出して

（中園）どうして「はちおうじ若者会議」を立ち上げたようと思ったのですか。

（楢島）役所に勤めているのですが、もっと地域のため、人のためにできることはないか探していました。そんなとき、多摩市若者会議の存在を知り、活動に加わって、同世代の方がこんなにも楽しく頑張っているんだ、ということを肌で経験しました。同じ頃、（一財）日本青年館が主催する「全国まちづくり若者サミット」に参加して、全国の若者から刺激を受けたことが大きなきっかけです。

（中園）すごいですね。私は26歳で青年団に入るまで、そんな想いを抱いたことがなかったです……。地域社会に若者が活躍する場が少ない印象でしょうか。

（楢島）八王子は学園都市と言われるほど若者が多いですが、若者の居場所は少ないイメージです。失敗しても良いから挑戦する場がほしい、と思っていました。

（中園）青年団でも先輩方からは、よく「失敗しても良い」と言われます。そういう場は貴重ですよね。

◆つながりをいかす

（中園）いろんなところで楢島さんが自分の想いを伝えてきたからこそ、それに呼応するメンバーが集まったと思います。

（楢島）以前から地域の講演会などには積極的に顔をだすようにしていました。参加した講演会で知り合った方が次のイベントの情報をくれて、そこにまた参加し、新たなつながりが生まれる。こうしてつながりの輪が広がっていきました。

（中園）意外な関係性に驚かされることもありますよね。具体的にどんな活動をしているのですか。

（楢島）現在、32名のメンバーがいます。これまでにワークショップや他地域の若者会議の視察、キャンドルナイトイベントやウクライナ人留学生との登山交流、街歩き企画などをしました。

（中園）発足して間もないのに、色々取り組んでいますね。どう企画を決めていますか。

（楢島）今はこの指とまれ方式です。飲み会の中で「面白そう！」となって、実現したのが街歩き企画。キャンドルナイトも閑古鳥が鳴いている場所をいかせないかと持ち掛けてもらったことや、ウクライナ人留学生との交流もメンバーに知り合いがいたことが呼び水となりました。

（中園）相互交流から、自由に生まれる発想が良いですね。

◆楽しさとのバランス

（中園）イベントごとにリーダーがいるのですか。

（楢島）毎回リーダーを決めているわけではなく、やりたい人が企画し、みんなで知恵を出し合って、それぞれが好きな関わり方で楽しく活動をしています。今後は、さらに一人ひとりが輝ける場にしていきたいです。

（中園）今は模索している最中でしょうか。

（楢島）そうですね。また、団体のネームバリューが上がるのは嬉しい反面、その分リスク管理もしなければと考えています。

（中園）若者が活動していると、時に羽目を外してしまうこともあると思います。一方で、枠組みづくりにこだわりすぎると楽しくなくなってしまう。

（楢島）全くその通りで、決めるところは決めて、あとは自由に楽しむことを大事にしていきたいです。

（中園）爆発的に楽しい時があることは青年団も若者会議も同じです。歴史と知識の蓄積が青年団の強み。若者会議のエネルギーも見習わないといけない。互いに手を取り合っていきましょう。活動の際はぜひ日本青年館にも来てください。

天然ガスがひらく未来

天然ガスは、クリーン性に優れた
環境負荷の少ないエネルギーです。

天然ガスはメタンを主成分とし、不純物を含まないクリーンなエネルギーです。大気汚染や酸性雨、地球温暖化の原因ともいわれる窒素酸化物（NOx）や二酸化炭素（CO_2）の排出量も少なく、環境保全に貢献する、地球にやさしいエネルギーです。

http://www.tokyo-gas.co.jp/

エネルギー・フロンティア TOKYO GAS

青年団って どんなところ？

～おらほのまちの青年団～

vol. 4

楽しさの波紋広がる
特定非営利活動法人南陽市観光協会（山形県・南陽市）

本企画では、地域で青年団を支援したり応援したりしてくれている方々にスポットライトを当て、地域にとって青年団が果たす役割や意義を、地元の人の声や想いから見つめていきます。

主な業務を市内のイベント運営や市のPRを担う観光協会からの視線を紹介します。

２０２３年２月に行われた雪灯かりまつりで雪像をつくる団員たち。その楽しそうな笑顔が、次第に住民にもひろがっていく

南陽市特産のさくらんぼと撮影する櫻井さん。取材した４月中旬、市内には白いサクランボの花が咲き乱れていた

◆好きをカタチに

（特非）南陽市観光協会は普段、多くの観光客を出迎えられるよう、駅での特産品販売やイベント企画の準備をしている。主事の櫻井義大（よしひろ）さんは、前職で主に接客業に携わっていた。県外に在住していた経験から、市内で生活する際にかすかな違和感をもち、住民に南陽市をもっと好きになってもらえる市の魅力を発掘し、宣伝していきたいと考えていた。しかし、毎日が繁忙期のため、普段の業務ばかりに追われ、なかなかその夢を実現できずにいた。そうした状況下で、２０２０年に南陽青年団が発足。地元にいる青年がコロナ禍にめげずに前進し、現時点では10代～20代の団員25名（４月時点）らが、協会と関わることとなる。

◆希望の光、青年団

春はさくら祭り、秋はきく（菊）らら祭、冬は雪灯かりまつりと季節ごとに様々なイベントが行われる南陽市。事業ごとに実行委員会を結成し、地元の商店街や保存会らが集っている。本番に向け会で協議を重ねるも、予算面や準備期間などからも、時代に合った新しい企画のアイデアに苦慮する事が多かった。しかし、今年2月に開催された雪灯かりまつりに青年団が加わったことで、素晴らしい案があふれ出てきた。さらに、協会や実行委員と連携することで、企画実現までこぎつけた。そして、みごと事業を成功裡（り）に終えることができた。

ご年配の方々ならではの経験や知識、人脈は、すぐには習得できないことが自明だ。一方、様々な業種や若者が集う組織だからこそ、柔軟な発想や行動力でできることもある。そんな青年団を、「南陽市の希望の光だ」と櫻井さんは真剣な面持ちで語る。各世代をつなぎ、各々の長所をいかすことで、この光は輝きを増すだろう。

◆求心力のある楽しさ

櫻井さん曰く、「もっと青年団と連携すれば、まちに活気があふれるし、何よりも一緒にいると楽しいから良い」とのこと。例えば、彼らに何か依頼をすると、企画立案から当日の運営まで、状況を前向きにとらえ、楽しそうに過ごしている。そして団員たちは、活動外でも活動の関係者と食事をしたり、地元のスーパーで挨拶を交わす。地元という狭い世間だからこそ、日頃から出会える青年団。団員一人ひとりが楽しそうに過ごし、関わった人たちへ、その輪を広めているのだ。この輪が、青年団と関わりたいと思わせてくれる大切なポイントである。

協会はこれからも、青年団を支え、時には支えられながら、地元南陽市の魅力を発信していく。

お問合せ：特定非営利活動法人南陽市観光協会はインターネットで「南陽市観光協会」と検索
南陽青年団はInstagramで「city.nanyo_youth」で検索

毎月17日発売！
月刊 社会教育
創刊1957年。実践家と研究者による市民のための社会教育総合誌。公共施設や教育施設における社会教育はいまどうあるべきか。毎号幅広いテーマで社会教育の在り方を見つめます。
定価：本体741円＋税

旬報社 〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町544 中川ビル4F
TEL03-5579-8973 FAX03-5579-8975 http://www.junposha.com/

日本青年館ホール 検索
「日本青年館ホール」で検索、もしくは右記QRコードよりお読み取りください。
〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4番1号
TEL:03-6447-5660
ACCESS：東京メトロ銀座線
外苑前駅2b出口より徒歩5分

私たちは日本の社会教育と全国の青年団を応援しています。

OPINION　私たち青年団の役割をあらためて問う

青年団とは地域にとって橋渡しのような存在だ。様々な事業を振り返っても、人と人、人と地域、地域と地域をつないでいる。例えば、２０２２年度に全国地域青年「実践大賞」を受賞した香川県小豆島町（しょうどしまちょう）青年団の「～小豆島あんどんまつり～ＳＤＧｓのヒカリでミライをともそう～」では、青年団を軸に地域おこし協力隊や神社、小学生がつながった。教宣大賞を受賞した大分県大分市舞鶴町（まいづるまち）青年会は、転入してきた新しい町民と住民をつなぎ、町内の交流の輪を広げたり、地域に多世代の人たちを巻き込み、そして活躍の場を創出したりしている。どの地域の青年団（会）にも共通しているのは、そこに住んでいる当事者たちが中心となっていることだ。地域づくりにはヨソ者・若者・馬鹿者が欠かせないと言われている。移住や定住、関係人口づくりが推奨される令和の時代において、内向きの閉ざされたコミュニティでは通用しないことはもはや明らかだ。よりよい地域社会を実現しようとするのであれば、私たちも旧来の考え方や「～すべき」論に凝り固まることなく、多様な考えを持つ人たちを受け入れ、違いを認め合いながら時間的や空間的なズレを埋めていくことが重要だ。

私たちは、自分以外の他人だけでなく、あらゆる外的要因を含めて他者との関係の中で学び育ちあってきた。その最たるものが地域である。地域は決して一枚岩ではなく、多様な人たちがそれぞれの考え方を持って生きている社会の舞台だ。その中に住む人たちをつなぎ、お互いにお互いを支え励まし合うことができるのが青年団である。

IKEDAN イケ団 イケてる青年団員 No.53

地域とともに伝統をつなげていく

児島　達志さん（37）
（福島県・明和青年団団長）

明和青年団は福島県の奥会津と呼ばれる地域、只見町（ただみまち）の明和地区で活動する。現在の団員数はおよそ30名。協力的で面倒見のいい人柄が特徴的なこの地区は、戦後から続く地元住民同士の縦のつながりや、青年団同士の横のつながりが強いことが特徴的だ。

現在、団長を務める児島さんは、すでに入団していた同級生に誘われたことがきっかけで入った。児島さん本人も、誘われる前から青年団が身近にあったため、自分もいずれ入るのかなと感じていたそうだ。

コロナ禍でもめげずに実施してきた活動は、盆踊りや駅伝大会、雪まつり、青年団独自の企画サンタ事業など。幅広く手掛け、今ある地域の活動を自分たちの代で消さないよう奮闘の日々が続いている。

「先輩たちの格好良い背中は忘れられないし、後世にも残していきたい」と児島さんは自らを奮い立たせている。地域と共にこれからも明和地区を盛り上げていく。

●長谷川綾さん（福島県連合青年会）より投稿

地域のみんなとがんばんべ！

編集後記

気づけば桜も散り、新緑がまぶしい頃でしょうか。先日、取材を受けていただいた方が、SNS に掲載紙の写真と共に「細かい心情まで聴いてくださり」と投稿してくださっているのを見つけました。取材記者としてこれ以上の喜びはありません。それでも紙面には載せきれないたくさんの想いがあります。その中でも読者に一番伝えたいこと。頭を絞って、文字にします。（か）

NISSEIKYO

最新の情報はこちら

https://www.facebook.com/nisseikyo01/

はらぺこ青年団

地元の名物を支局員が青年団のエピソードとあわせてご紹介。

ホルモンと言えば「熊ホル」と言うくらい人気の熊谷（くまがい）精肉店の豚ホルモン。バーベキューの時や食べたくなった時には必ずと言っていいほど買いに行っています。

地元の青年団の交流会を行い、肉はどうする？となった際には「肉は熊ホルだよな」と、一番最初に出てくるほど団員たちの好物でもあります。一袋に豚の色々な部位が入っており、１つで大満足するくらい美味しくいただけます。味は味噌・塩・キムチがあり、通販もできますので、是非みなさんも食べてみてほしいですね！

●松田恵美子支局員（岩手県青年団体協議会）より投稿